

V 水稲の病害虫防除

—— 発病・加害時期
 == 発病・加害最盛期

作型・病害虫名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平坦部移植 (中生:ヒノヒカリ)						●	▲	○			■		
中山間部移植 (極早生:キヌヒカリ)					●	▲	○				■		
いもち病							==	==	==				
紋枯病								==	==				
白葉枯病									==	==			
ごま葉枯病										==	==		
縞葉枯病											==	==	
もみ枯細菌病							==						
内えい褐変病											==	==	
稲こうじ病												==	==
小粒菌核病													==
萎縮病													==
イネミズゾウムシ													==
イネドロオイムシ													==
ツマグロヨコバイ													==
ヒメトビウンカ													==
セジロウンカ													==
トビイロウンカ													==
ニカメイガ(ニカメイチュウ)													==
イチモンジセセリ(イネツトムシ)													==
コブノメイガ													==
フタオビコヤガ(イネアオムシ)													==
斑点米カメムシ類													==
イネクロカメムシ													==
イナゴ類													==
スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)													==

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

水稲の種子消毒

1 種子消毒薬剤の使用法

農薬名	RAC コード	希釈倍数	浸漬時間	ば か 苗 病	い も ち 病	ご ま 葉 枯 病	も み 枯 細 菌 病	苗 立 枯 細 菌 病	セ イ ネ チ シ ユ ン ガ レ	苗立枯病			
										ト リ コ デ ル マ	リ ゾ ー プ ス	ピ シ ウ ム	フ ザ リ ウ ム
テクリードCフロアブル	3 M1	20倍 (高濃度)	10分	○	○	○	○	○		○	○		
		200倍	24時間	○	○	○	○	○		○	○		
ベンレートT水和剤20 注(3)	M3 1	20倍 (高濃度)	10分	○	○	○			○	○	○	○	○
		200倍	6～24時間	○	○								
			24～48時間	○	○	○			○				
			24～48時間	○	○								
エコホープDJ 注(4)	BM2	200倍	催芽時：24時間	○				○	○				
			浸種前～催芽時：24時間		○						○		
			浸種前～催芽前：24～48時間	○				○	○				
スミチオン乳剤	1B	1,000倍	6～72時間						○				
パダンSG水溶剤 劇	14	1,500～ 3,000倍	浸種前：24時間						○				

(注)

- (1) ばか苗病等の発生の多いところでは、高濃度短時間浸漬の方法で処理する。
- (2) 薬液の温度は10℃以下や30℃以上を避ける。
- (3) ベンレートT水和剤20は、浸漬処理後風乾する。
- (4) エコホープDJは生物農薬で、耐性菌出現のリスクが低いですが、ベンレート水和剤等、併用できない薬剤があるので注意する（効果）。また処理後は風乾せず、直ちに浸種あるいは催芽させる。
- (5) スミチオン乳剤、パダンSG水溶剤は、いずれかをイネシンガレセンチュウ消毒剤として、同虫に登録の無い殺菌剤の浸漬処理時に混和して使用する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 種子消毒・水稲は種の手順

塩水選

(水10L当たり)

水洗い

◎塩水選における比重と食塩または硫安の量目安

種類	比重	食塩	硫安
うるち	1.08 (1.13)	1.1kg (2.0kg)	1.4kg (2.5kg)
もち	1.06 (1.08)	0.8kg (1.1kg)	1.0kg (1.4kg)

袋詰め

- ・サラシ等の網袋に5分目程度入れる。
- ・容量に余裕をもたせて縛る。

※()内は、より強い選別をする場合の目安

種子消毒

化学農薬による消毒
(種子消毒) 参照

- ・水洗いはしない。

温湯消毒 (60℃、10分間)
 ・処理中の温度を一定に保つように湯量に注意する。
 ・処理後は直ちに流水中で冷却する。
 ・温度ムラが出ないように、時々網を揺する。

生物農薬による防除
(種子消毒) 参照

風乾

- 12~24時間陰干しする。
- ・風乾により種子に薬剤をしっかりと付着させると効果が高まる。
 - ・風乾する必要のない薬剤もある。(テクリードCフロアブルなど)

浸種と催芽

- ・浸種は、必ず停滞水中で行う。流水では薬効が落ちる恐れがある。水が汚れた場合は静かに水を入れ替える。

水温	浸種時間
15℃	5~6日間
20℃	4~5日間

は種

- ・芽が1mm程度になれば日陰で風乾してからは種する。芽が伸びすぎると、は種時に折れてしまう可能性があるため注意する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

箱施用剤適用病害虫一覧表

- 1 薬剤によっては、適用のない病害虫もあるので下表を参照する。
- 2 SDHI剤(7)等は耐性菌が生じやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 3 他作物に影響を及ぼす場合があるので、薬剤が育苗箱からこぼれ落ちないように処理する。

農薬名	成分数	RACコード		育苗箱1箱当たり使用量(g/箱)	使用時期	適用病害					適用害虫									
		殺虫IRAC	殺菌FRAC			いもち病	紋枯病	白葉枯病	もみ枯細菌病	内えい褐変病	ごま葉枯病(穂枯れ)	ウンカ類	ツマグロヨコバイ	(ニカカメイテユウ)	コブノメイガ	(イチモンジセリ)	イネミズゾウムシ	イネドロオウムシ	イナゴ類	(フタオビコヤガ)
リディア箱粒剤	1	4 F		50	移植3日前～移植当日						○	○	○			○	○	○	○	
フェルテラゼクサロン箱粒剤	2	2 8 4 E		50	は種時(覆土前)～移植当日						○	○		○	○				○	
					移植3日前～移植当日								○			○	○			
ブーンアレス箱粒剤	2	-	P 8	50	は種前(床土または覆土混和)	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	
					は種前(覆土混和)									○						
					は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
					は種時(覆土前)				○											
稲名人箱粒剤	2	-	P 3	50	は種前(床土混和)						○	○	○	○	○	○	○	○		
					は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ビームプリンス粒剤	2	2 B	16.1	50	移植3日前～移植当日	○					○		○	○	○	○	○			
サンスパイク箱粒剤	3	2 8 4 E	16.3	50	移植3日前～移植当日	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	
					緑化期～移植当日	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○			○
ブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤	3	2 8 4 E	P 3	50	移植3日前～移植当日					○										
					移植3日前～移植当日															
サンフェスタ箱粒剤	3	2 8 4 A	16.3	50	移植3日前～移植当日	○		○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
					は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○
防人箱粒剤	3	2 8 4 E	P 3	50	は種時(覆土前)～移植当日	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	
					は種時(覆土前)				○											
フルスロットル箱粒剤	4	2 8 4 E	P 3 7	50	は種時(覆土前)～移植当日	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○		○	
					移植当日					○	○									

育苗箱は、30×60×3cm、床土+覆土約5Lとしている。

適用病害虫について：○…登録あり

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

苗立枯病

留意事項

- 1 糸状菌による苗病害を総称して苗立枯病と呼ぶ。
- 2 主に別表の6種の病原菌がある。
- 3 箱育苗で発病が多い。
- 4 種子消毒を徹底する。
- 5 粉剤を使用する場合は、まず砂土等で増量してから床土に混合するとムラ無く混ぜやすい。
- 6 前年使用した育苗箱を用いる場合は、イチバン500～1,000倍液に瞬間浸漬、またはケミクロンG1,000倍液に10分間浸漬または、500倍液に瞬間浸漬もしくはジョウロ散布して消毒してから使う。（XIV 農業用資材の消毒法 参照）

防除方法

- 1 土壤水分の管理に注意し、過湿、過乾を避ける。
- 2 温度の激変は本病発生の原因となるので、苗を高温、低温にあわせないようにする。
- 3 は種前に下記の薬剤を育苗箱（30×60×3cm 使用土壤約5L）の土壤に均一に混和する。
 - ・ [タチガレン粉剤](#) 3 2
 - 【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 3～6g／箱 は種前／1回】
- 4 は種時に下記の薬剤を育苗箱（30×60×3cm、使用土壤約5L）に土壤かん注する。
 - ・ [タチガレエースM液剤](#) 3 2 4
 - 【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 500～1,000倍 500ml／箱
は種時または発芽後／1回】
 - または【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 1,000倍 1L／箱 は種時／1回】
 - ・ [ダコニール1000](#) M 5
 - 【苗立枯病（リゾープス菌） 500～1,000倍 500ml／箱】または
 - 【苗立枯病（リゾープス菌） 1,000～2,000倍 1L／箱
は種時～緑化期（は種14日後まで）／2回】
 - ・ [ナエファインフロアブル](#) U 1 7
 - 【苗立枯病（ピシウム菌、リゾープス菌、フザリウム菌） 2,000倍 500ml～1L／箱
は種時／2回】または
 - 【苗立枯病（ピシウム菌） 1,000～2,000倍 500ml／箱 は種時～緑化期／2回】
 - または
 - 【苗立枯病（リゾープス菌、フザリウム菌） 1,000倍 500ml／箱 は種時／2回】
- 5 育苗中に発生を認めたら速やかに下記のいずれかの薬剤を育苗箱（30×60×3cm、使用土壤約5L）にかん注する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

・ **ベンレート水和剤** 1

【苗立枯病（フザリウム菌） 500～1,000倍 500ml／箱 は種時、
（トリコデルマ菌） 500～1,000倍 500ml／箱 または
1,000倍 1L／箱 は種時とは種7日後頃／2回】

・ **タチガレエースM液剤** 3 2 4

【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 500～1,000倍 500ml／箱
は種時または発芽後／1回】
または【苗立枯病（ピシウム菌、フザリウム菌） 1,000倍 1L／箱 は種時／1回】

・ **バリダシン液剤5** U 1 8

【苗立枯病（リゾクトニア菌、白絹病菌） 1,000倍 500ml／箱
は種時～発病初期／1回】

● 苗立枯病病原菌の種類と薬剤の効果の関係 (○は効果有り)

	白絹病菌	トリコデルマ菌	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	リゾクトニア菌
ダコニール					○	
タチガレン、 タチガレエースM			○	○		
バリダシン	○					○
ベンレート		○		○		
ナエファイン			○	○	○	

いもち病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、育苗期から成熟期まで発生する。発病部位によって、育苗中～後期の苗いもち、本田の葉いもちと出穂後の穂いもち（穂首いもち、枝梗いもち、みごいもち、靱いもち）、節いもちなどがある。
- 2 病原菌の菌糸や分生子が被害わら・もみ等で越冬し、翌年、種子伝染、空気伝染して発病する。
- 3 気温25～28℃、多湿で日照不足の時に多発し、降雨、チッソ過多、過繁茂などの場合に発病が助長される。
- 4 基本的に薬剤の効果は発病予防効果だがブラシン剤は発病後の治療効果もある。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 種子は塩水選を行い、必ず種子消毒をする。（（種子消毒の項）参照）
- 2 厚まきを避け、健苗の育成に努める。
- 3 罹病苗を本田に移植しない。
- 4 本田での密植は、発病を助長することがあるので避ける。
- 5 補植用の置き苗は発生源となりやすいので本田に放置しない。
- 6 チッソ質肥料の過用を避け、追肥は遅れないようにする。
- 7 低水温、日照不足はイネの本病に対する抵抗性を低下させるので山間部では冷水かんがいにならないようにする。
- 8 常発地では深耕に努め、堆きゅう肥による土作りやケイ酸質肥料（ケイカルなど）の増施を行う。
- 9 耐病性品種を用いる。
- 10 山間地等のいもち病発生の多いところではいもち病に登録のある防除薬剤を箱施用する。（詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照）
- 11 本田において、葉いもち及び穂いもちの発生が見込まれる場合には、下記の薬剤を施用する。

・ [オリゼメート粒剤](#) P 2

【3～4kg/10a 散布 葉いもち：初発10日前～初発時、
穂いもち：出穂3～4週間前（収穫14日前）/2回】

・ [コラトップ粒剤5](#) 1 6. 1

【3～4kg/10a 散布 葉いもち：初発10日前～初発時、
穂いもち：出穂30～5日前/2回】

・ [ゴウケツ粒剤](#)、[サンブラス粒剤](#) 1 6. 3

【3～4kg/10a たん水散布 出穂5日前（収穫30日前）/1回】

・ [ゴウケツパック](#)、[サンブラスパック](#) 1 6. 3

【(10個)450g/10a 投げ込み散布 出穂5日前（収穫30日前）/1回】

・ [フジワン粒剤](#) 6

【3～5kg/10a たん水散布 葉いもち：初発7～10日前、
穂いもち：出穂10～30日前（収穫30日前）/2回】

- 12 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・ [ブラシンフロアブル](#) U 1 4 1 6. 1 【1,000倍 7日/2回】

紋枯病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で高温（28～32℃）、多湿時に多発する。
- 2 チッソ過多、密植、分けつ過多で発病が助長される。
- 3 キヌヒカリは本病にやや弱い。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 4 前年の被害株や畦畔などの罹病雑草に形成された白色～淡褐色の直径2mm程度の菌核が越冬し、翌年の第1次伝染源となる。

防除方法

- 1 チッソ質肥料の過用を避け、なるべく浅水管理する。
- 2 畦畔、水路などの雑草を刈り取る。
- 3 代かき後の浮遊物には、紋枯病の菌核が多いため除去する。
- 4 被害わらは、完熟堆肥にして施用する。
- 5 過繁茂にならないようにする。
- 6 下記の薬剤を穂ばらみ期から出穂期にかけて散布する。
 - ・ [リンパー粒剤](#) 7 【3～4kg/10a 30日/2回】
- 7 下記の薬剤を出穂4～2週間前に施用する。
 - ・ [モンカット粒剤](#) 7
 【3～4kg/10a たん水散布 出穂30～10日前（収穫14日前）/3回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [バリダシン液剤5](#) U18 【1,000倍 14日/5回】
 - ・ [モンガリット粒剤](#) 3 【3～4kg/10a たん水散布 45日/2回】

白葉枯病

留意事項

- 1 病原菌は細菌の一種で被害わらや河川や畦畔沿いのサヤヌカグサ等の多年生雑草の根部で越冬し、それが翌年の第1次伝染源となる。
- 2 豪雨などで田が浸水、冠水すると多発する。
- 3 病原菌は葉の気孔や傷口から侵入する。常発地では浸冠水や台風直後に薬剤を散布する。
- 4 罹病葉を水に入れると、数分で切り口から白い糸状液が出る。

防除方法

- 1 浸水、深水を避ける。
- 2 チッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 冬期に畦畔や水路の雑草を処分する。
- 4 露のある時は、なるべく発生田に入らないようにする。
- 5 常発地では、いもち病との同時防除をかねて粒剤の予防散布を行う。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) P2
 【3～4kg/10a 移植活着後及び出穂3～4週間前（収穫14日前）/2回】
 - ・ [ルーチン粒剤](#) P3 【1kg/10a たん水散布 30日/2回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

ごま葉枯病

留意事項

- 1 病原菌は糸状菌の一種で病原菌の菌糸が稲わらやもみで越冬し、翌年、空気伝染や種子伝染する。
- 2 苗の段階から発病し、秋には穂に発生し、穂枯れを起こす。
- 3 やや砂質土のいわゆる「秋落田」に発生しやすい。
- 4 ごま葉枯病が多発生すると穂枯れを起こしやすくなるので、多発ほ場では出穂期～傾穂期に薬剤を散布する。

防除方法

- 1 チッソ、カリ、鉄、マンガン、ケイ素などの欠乏は発病を助長するので、ケイ酸質肥料（ケイカルなど）を施用し、土壌の改良を図る。
- 2 硫酸根肥料（硫安など）の連用を避け、チッソ質肥料の分施をする。
- 3 生わらは、早期にすき込むか堆肥として施用し、未熟な有機質資材の施用を避ける。
- 4 被害わらを本田周辺に放置しない。
- 5 根腐れを起こさないよう、かん排水など水管理に注意する。
- 6 種子消毒を行う。（（種子消毒）参照）
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ブラシンフロアブル](#)

U14	16.1
-----	------

 【1,000倍 7日／2回】
 - ・ [オリブライト250G](#)

11

 【250g／10a 散布 出穂10日前まで（但し、収穫45日前まで）／1回】

縞葉枯病

留意事項

- 1 本病はヒメトビウンカによって媒介されるウイルス病である。
- 2 近年、増加傾向にある。
- 3 本田初期に発生すると、新葉が細くなり巻いて垂れ下がって枯れ、「ゆうれい症状」と呼ばれる状態になる。本田後期の感染では、黄緑色の条斑を生じ、出穂が異常となって出すくみ症状を起こす。
- 4 本府の主力品種ヒノヒカリ、きぬむすめ、キヌヒカリはいずれも本病への抵抗性がない。

防除方法

- 1 ウイルス病のため、本病に対する登録農薬はない。
- 2 常発地では、早植えを避けるとともに田植時期を揃える。
- 3 密植を避けて通風を良好にするとともにチッソ質肥料の過用を避ける。
- 4 本田初期の感染を防止するため、ウンカ類に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。（詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照）

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 5 6月下旬～7月上旬の感染が多いので、この時期のヒメトビウンカの防除を徹底する。
- 6 防除については、ヒメトビウンカの項を参照する。
- 7 収穫後は発病したひこばえを介して保毒虫率が高まる可能性があるため、早めに刈り株をすき込み、ひこばえを処分する。

もみ枯細菌病

留意事項

- 1 病原菌は細菌の一種で、育苗期の苗腐敗症と出穂期以降の穂枯れを起こす。
- 2 育苗時期、特に出芽時の温度が高い場合に発病しやすいので、30℃以下になるように、温度管理に注意する。
- 3 出穂期に高温で降雨日数が多いと発病しやすい。穂に白色の萎凋したもみが混在し、後に灰白色～淡黄褐色となって、稔実不良となる。
- 4 前年多発したところでは予防散布する。

防除方法

- 1 種子は、無病ほ場のものを選ぶ。
- 2 種子は塩水選を行い、必ず種子消毒をする。
- 3 幼苗腐敗症(イネもみ枯細菌病菌)の防除には、育苗箱(30×60×3cm 使用土壌約5L)の覆土前に、は種した種もみの上から下記の薬剤を均一に散布する。
 - ・ **カスミン液剤** 2 4 【4～8倍 希釈液50ml/箱 覆土前/1回】
- 4 発病ほ場の稲わらやもみからは水田に直接還元せず、堆肥化するなどし、病原菌密度を減らしてから利用する。
- 5 深水や冠水状態になると発病が多くなるので、生育初期は浅水管理とする。
- 6 出穂前に下記の薬剤を散布する。
 - ・ **オリゼメート粒剤** P 2
 - 【3～4kg/10a 移植活着後及び出穂3～4週間前(収穫14日前)/2回】
 - ・ **コラトップ粒剤5** 1 6. 1 【4kg/10a 出穂30～5日前/2回】
- 7 出穂直前～穂揃期に下記の薬剤を散布する。
 - ・ **ブラシンフロアブル** U 1 4 1 6. 1 【1,000倍 7日/2回】

内えい褐変病

留意事項

- 1 病原菌は細菌の一種で、出穂前後に高温で降雨があると発生しやすい。
- 2 もみの内穎が特異的に褐変し、外穎が褐変することは少ないので他病と見分けやすい。
- 3 前年発生したほ場では発生しやすい。
- 4 薬剤は出穂前後2回散布するほうが効果が高い。昨年発生が見られたほ場では穂ばらみ期(出穂5日前～出穂日)に必ず薬剤を散布する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 チツソ質肥料の過用を避ける。
- 2 種子は必ず塩水選を行う。
- 3 発生したほ場では、稲わらや不稔もみを堆肥化してから利用する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
 - ・ [ブラシフロアブル](#) U 1 4 1 6 . 1 【1,000倍 7日／2回】
 - ・ [ゴウケツパック](#)、[サンブラスパック](#) 1 6 . 3
 【(10個)450g／10a 投げ込み散布 出穂5日前（収穫30日前）／1回】
 - ・ [ゴウケツ粒剤](#)、[サンブラス粒剤](#) 1 6 . 3
 【3～4kg／10a たん水散布 出穂5日前（収穫30日前）／1回】

稲こうじ病**留意事項**

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、出穂前後に降雨があれば発生しやすい。
- 2 前年に穂にできた厚膜孢子等が田面や畦畔に落ちて越冬し、翌年の伝染源になる。
- 3 多発すると不稔籾が多くなり、収量低下を起こす。また、羅病籾や菌塊が籾や玄米に混入すると検査で規格外になるなど、品質低下の原因になる。

防除方法

- 1 種子は無病ほ場のものを使用する。
- 2 多肥栽培を避ける。
- 3 下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ブラシフロアブル](#) U 1 4 1 6 . 1 【1,000倍 7日／2回】
 - ・ [モンガリット粒剤](#) 3 【3～4kg／10a たん水散布 45日／2回】
 - ・ [フジワン粒剤](#) 6 【3～4kg／10a たん水散布 出穂10～30日前（収穫30日前）／2回】

小粒菌核病**留意事項**

- 1 病原菌は糸状菌の一種で、本病には小黒菌核病と小球菌核病があり、後者は湿田に多く発生する。
- 2 被害刈株やわら、土壌上の菌核が伝染源になり、代かき時に浮き上がりイネに感染する。
- 3 高温多湿時に被害が多い。
- 4 株元に薬剤を十分散布する。

防除方法

- 1 前年の被害わらは施用しない。
- 2 分けつ最盛期は浅水とし、排水を良好にして根腐れを防ぐ。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 カリ肥料を十分施し、チッソ肥料の過用を避ける。
- 4 下記の薬剤を散布する。
 - ・ [フジワン粒剤](#) 6【4~5kg/10a たん水散布 出穂10~30日前(収穫30日前)/2回】

萎縮病

留意事項

- 1 本病はおもにツマグロヨコバイによって媒介されるウイルス病である。また、一部イナズマヨコバイによっても媒介される。

防除方法

- 1 ウイルス病のため、本病に対する登録農薬はない。
- 2 常発地では早植えを避け、できるだけ田植えを遅らし、また田植時期を揃える。
- 3 本田初期の感染を防止するため、媒介虫であるツマグロヨコバイの防除薬剤を育苗箱施用する。防除については、ツマグロヨコバイの項を参照。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

イネミズゾウムシ

留意事項

- 1 アメリカからの侵入害虫で成虫越冬し、春に水田に入水すると侵入してくる。
- 2 成虫は葉を白い筋状に食害するが、土中で根を食害する幼虫の被害が大きい。
- 3 成虫の移動範囲が広いので、地域で一斉防除を行う。
- 4 パック剤や投げ込み剤は藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意する。

防除方法

- 1 越冬世代成虫の侵入が集中しないように周囲の水田より極端な早植えを避ける。
- 2 幼虫の根の食害で特に株張りが悪い場合は、予備苗による補植を行うほか、浅水に管理し、健全な発根を促す。
- 3 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照)
- 4 越冬世代成虫の発生が多い場合には6月上～中旬に下記のいずれかの薬剤を本田施用する。
 - ・ [トレボン粒剤](#) 3 A 【2～3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [なげこみトレボン](#) 3 A
【水溶性容器4～6個(200～300ml)/10a 5葉期以降(21日)/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【3kg/10a 7日/3回】

イネドロオウムシ

留意事項

- 1 自分の糞を背中に背負った幼虫(その姿からイネドロオウムシと呼ばれる)がイネの葉を白い筋状に食害する。
- 2 成虫も同様にイネの葉を食害する。正式な名称はイネクビボソハムシという。
- 3 山間の涼しい地域の水田で発生する。イネミズゾウムシと異なり、幼虫が土中にはいないので根は食害しない。成虫で越冬する。
- 4 パック剤や投げ込み剤は藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意する。

防除方法

- 1 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照)
- 2 越冬世代成虫の発生が多い場合には6月上～7月中旬に次のいずれかの薬剤を施用する。
 - ・ [トレボン粒剤](#) 3 A 【2～3kg/10a 21日/3回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [なげこみトレボン](#) 3 A
【水溶性容器4～6個（200～300ml）／10a 5葉期以降（21日）／3回】
- ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【3kg／10a 7日／3回】

ツマグロヨコバイ

留意事項

- 1 イネを直接加害するだけでなく萎縮病ウイルスを媒介する。
- 2 多発時には、7月中下旬または8月中下旬に1～2回防除を行う。
- 3 散布は株元まで十分に薬剤がゆきわたるように行う。
- 4 多発地帯では共同防除など広域防除が効果的である。
- 5 投げ込み剤は、藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので注意する。

防除方法

- 1 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、越冬密度を下げる。
- 2 密植を避け、通風を良好にするとともにチッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
（詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照）
- 4 発生が多い場合は下記の薬剤を施用する。
 - ・ [トレボン粒剤](#) 3 A 【2～3kg／10a 21日／3回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) 3 A 【1,000～2,000倍 14日／3回】
 - ・ [なげこみトレボン](#) 3 A
【水溶性容器入り10個（500ml）／10a 5葉期以降（21日）／3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【3kg／10a 7日／3回】
 - ・ [エクシード粉剤DL](#) 4 C 【3kg／10a 7日／3回】
 - ・ [エクシードフロアブル](#) 4 C 【2,000倍 7日／3回】
 - ・ [エミリアフロアブル](#) 4 F 【1,000倍 7日／2回】

ヒメトビウンカ

留意事項

- 1 吸汁による直接害よりも、縞葉枯病の媒介による被害の方が大きい。
- 2 縞葉枯病は6月下旬～7月上旬の感染が多いので、この時期のヒメトビウンカの防除を徹底する。
- 3 幼虫が雑草中で越冬し、春先にイネ科雑草や麦畑で成虫となり繁殖し、その子である第1世代成虫が苗代や田植直後の水田へ飛来し加害する。
- 4 ひこばえでも繁殖するため収穫後、できるだけ早く耕うんする。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 冬～春期に畦畔の雑草を刈り取り、越冬密度を下げる。
- 2 密植を避け、通風を良好にするとともに、チッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 ウンカ類に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照)
- 4 発生が多い場合は下記の薬剤を散布する。
 - ・ [アプロード水和剤](#) 1 6 【ウンカ類幼虫 1,000～2,000倍 7日/4回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [トレボン粒剤](#) 3 A 【ウンカ類 2～3kg/10a 21日/3回】
 - ・ [エクシード粉剤DL](#) 4 C 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [エクシードフロアブル](#) 4 C 【ウンカ類 2,000倍 7日/3回】
 - ・ [エミリアフロアブル](#) 4 F 【ウンカ類 1,000倍 7日/2回】

セジロウンカ（夏ウンカ）、トビイロウンカ（秋ウンカ）

留意事項

- 1 セジロウンカ、トビイロウンカとも国内では越冬できず、中国大陸からの飛来害虫である。
6月下旬～7月中旬の梅雨時期に飛来することが多い。
- 2 早期防除が大切なので発生予察情報に注意し、早期発見に努める。
- 3 セジロウンカの多発時には7月中旬～8月上旬に1～2回本田防除が必要である。8月下旬以降は水田から移出することが多く被害は少なくなる。
- 4 トビイロウンカの多発時には8月上旬～9月中旬に1～2回本田防除が必要である。
- 5 散布は株元まで十分に薬剤が行き渡るように行う。
- 6 投げ込み剤は、藻類やウキクサが多発している水田では薬剤の拡散が妨げられるので使用しない。
- 7 近年、中国大陸から薬剤抵抗性個体群が飛来して問題になっている。

防除方法

- 1 過繁茂はウンカ類の増殖を助長するので、密植を避け、通風を良好にするとともにチッソ質肥料を過用しないこと。
- 2 ウンカ類に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照)
- 3 7月以降本田で発生が見られたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [エクシード粉剤DL](#) 4 C 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [エクシードフロアブル](#) 4 C 【ウンカ類 2,000倍 7日/3回】
 - ・ [エミリアフロアブル](#) 4 F 【ウンカ類 1,000倍 7日/2回】
 - ・ [オーケストラ粉剤DL](#) — 【ウンカ類幼虫 3～4kg/10a 7日/3回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [オーケストラフロアブル](#) — 【ウンカ類幼虫 1,000倍 7日/3回】、
高濃度少量散布【ウンカ類幼虫 200倍 25L/10a 7日/3回】
- ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
- ・ [スタークル豆つぶ](#) 4 A 【ウンカ類 250~500g/10a 7日/3回】
- ・ [スタークル粉剤DL](#)、[アルバリン粉剤DL](#) 4 A 【ウンカ類 3kg/10a 7日/3回】
- ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A
【ウンカ類 3,000倍 7日/3回】
- ・ [トレボン粒剤](#) 3 A 【ウンカ類 2~3kg/10a 21日/3回】
- ・ [パダントレボン粒剤L](#) 劇 3 A 1 4 【ウンカ類 3kg/10a 30日/3回】
- ・ [トレボン粉剤DL](#) 3 A 【ウンカ類 3~4kg/10a 7日/3回】
- ・ [トレボン乳剤](#) 3 A 【ウンカ類 1,000~2,000倍 14日/3回】
- ・ [アプロードパダン粒剤](#) 劇 1 4 1 6 【ウンカ類幼虫 3~4kg/10a 30日/4回】

ニカメイガ（ニカメイチュウ）

留意事項

- 1 近年は発生量が減っているが、重要害虫である。幼虫がイネの茎内に食入して穂枯れを起こす。枯れた白穂を引っ張ると簡単に抜け、下部に食害があれば本虫の食害を疑う。
- 2 発蛾最盛期
越冬世代成虫：5月下旬～6月上旬
第1世代成虫：7月下旬～8月中旬
第2世代幼虫はイネ茎内でそのまま越冬する。
- 3 中山間地帯など田植えの特に早い地域では、発蛾最盛期が早くなるので防除時期を早める。
- 4 有機リン剤抵抗性が一部地域で発生しているので注意する。

防除方法

- 1 早植えを避ける。
- 2 チッソ質肥料の過用を避ける。
- 3 第2世代幼虫がおもに被害わら内で越冬するので、多発年には翌年のために冬期に耕起したり、わらの処分をする。
- 4 越冬世代成虫が産む第1世代幼虫の防除のために本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
（詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照）
- 5 発生が多い場合には、越冬世代発蛾最盛期からその後10日～14日後と第1世代発蛾最盛期から7日後頃に下記のいずれかの薬剤を散布する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [パダン粒剤4 劇](#) 1 4 【3～4kg/10a 30日/6回】
- ・ [パダンSG水溶剤 劇](#) 1 4 【1,500倍 21日/6回】
- ・ [トレボン粒剤](#) 3 A 【第1世代 3kg/10a 21日/3回】
- ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【3kg/10a 7日/3回】

イチモンジセセリ（イネツトムシ）

留意事項

- 1 ふ化した幼虫は葉を筒状に丸めて中に潜み、夜間に食害する。成長すると葉を数枚綴り合わせて苞（つと）を作り、中に隠れている。
- 2 年3～4回発生し、暖冬の年に発生が多い。
- 3 若齢期防除に努める。

防除方法

- 1 チッソ質肥料の過用を避ける。
- 2 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
（詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照）
- 3 発生が見られたら下記の薬剤を幼虫発生期（7月下旬～8月上旬）に散布する。

- ・ [パダン粒剤4 劇](#) 1 4 【3～4kg/10a 30日/6回】
- ・ [パダンSG水溶剤 劇](#) 1 4 【1,500倍 21日/6回】
- ・ [トレボン粉剤DL](#) 3 A 【4kg/10a 7日/3回】

コブノメイガ

留意事項

- 1 府内では越冬できずセジロウンカ、トビイロウンカと同様、下層ジェット気流に乗って毎年梅雨期に中国大陸から飛来する。年による発生量の変動が大きい。
- 2 幼虫が1枚の葉を縦に綴って中に潜み、夜間に薄皮一枚を残してかすり状に食害する。食害痕は白くなり目立つ。
- 3 発蛾最盛期
飛来世代成虫：6月下旬～7月中旬
第1世代成虫：7月下旬～8月中旬
第2世代成虫：8月下旬～9月中旬
- 4 被害が多いのは第2世代幼虫期の8月上～中旬及び第3世代幼虫期の9月上～中旬。

防除方法

- 1 チッソ質肥料の過用で葉色が濃い水田は周囲に比べて成虫が集中して産卵し、被害が大きくなるので注意する。また、一枚の水田の中でも葉色の濃い部分に被害が集中する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 飛来世代が産む第1世代幼虫を防除するために本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照)
- 3 発生が多い場合は発蛾最盛期に下記の薬剤を散布する。老齢幼虫には薬剤の効果が薄いので、若齢幼虫期を狙って散布遅れのないようにする。止葉の被害率が2~3割以上になると減収する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) 1 4 【3~4kg/10a 30日/6回】
 - ・ [パダンSG水溶剤 劇](#) 1 4 【1,500倍 21日/6回】
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) 3 A 【3~4kg/10a 7日/3回】
 - ・ [トレボン乳剤](#) 3 A 【1,000倍 14日/3回】

フタオビコヤガ (イネアオムシ)

留意事項

- 1 密植、過繁茂でチッソの効いた高湿度の水田に多発する。
- 2 幼虫は緑色のイモムシでイネの葉を初期にはかすり状に食害し、大きくなると不規則に食害し、イネの見た目がボロボロになる。
- 3 終齢幼虫はイネの葉を2~3折りに折りたたんで苞を作り、中で蛹になる。
- 4 苞は切り離され水面に浮かび流れて行くこともあり、蛹で越冬する。

防除方法

- 1 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
(詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照)
- 2 発生が多い場合には下記の薬剤を散布する。
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) 3 A 【3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル粉剤DL](#)、[アルバリン粉剤DL](#) 4 A 【3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) 1 4 【3~4kg/10a 30日/6回】

斑点米カメムシ類

留意事項

- 1 近年、本府ではアカヒゲホソミドリカスミカメ、ヒメホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメなどの被害が多い。
- 2 イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくる。
- 3 薬剤散布は穂揃期(出穂すべき穂のうち7割から8割が出穂している時期)に行う。発生が多い時は乳熟初期(出穂後10日頃)にも散布する。
- 4 アカヒゲホソミドリカスミカメは別名イネホソミドリカスミカメとも呼ばれる。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 ほ場周辺の畦畔や休耕田の雑草を刈り取る。ただし、出穂前後の除草はカメムシ類を水田に追い込むことになるため、この時期は実施しない。
- 2 畦畔にグランドカバープランツを植栽することで、イネ科雑草を減らす。
- 3 下記の薬剤を出穂期に根元まで届くように散布する。
 - ・ [トレボン乳剤](#) 3 A 【カメムシ類 2,000倍 14日/3回】
 - ・ [スミチオン乳剤](#) 1 B 【カメムシ類 1,000倍 21日/2回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A
 - 【カメムシ類 2,000倍 7日/3回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A
 - 【カメムシ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [スタークル豆つぶ](#) 4 A 【カメムシ類 250g/10a 7日/3回】
 - ・ [キラップ粒剤](#) 2 B 【カメムシ類 3kg/10a たん水散布 14日/2回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A 【カメムシ類 3~4kg/10a 7日/3回】

イネクロカメムシ

留意事項

- 1 斑点米カメムシ類とは異なり、越冬成虫は6~7月に水田に侵入し、イネの株元に生息し、葉鞘から吸汁加害する。生育初~中期に加害されると葉先がよじれ、草丈が低く、分けつ不良となり、減収する。

防除方法

- 1 下記の薬剤を発生初期（6月下旬~7月上旬）に散布する。
 - ・ [トレボン乳剤](#) 3 A 【カメムシ類 2,000倍 14日/3回】
 - ・ [スミチオン乳剤](#) 1 B 【カメムシ類 1,000倍 21日/2回】
 - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A 【カメムシ類 3kg/10a 7日/3回】
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A 【カメムシ類 3~4kg/10a 7日/3回】

イナゴ類

留意事項

- 1 幼虫は畦畔等のイネ科雑草を食害した後、本田に移動して水稲を加害する。そのため若齢幼虫期に畦畔への散布や本田の額縁散布を行うと効果が高い。
- 2 畦畔等の雑草を刈り取る。

防除方法

- 1 本虫に登録のある防除薬剤を育苗箱施用する。
（詳しくは箱施用剤適用病害虫一覧表のページ 5-4を参照）

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 発生が多い場合には下記の薬剤を施用する。
- ・ [トレボン乳剤](#) 3 A 【1,000~2,000倍 14日/3回】
 - ・ [トレボン粉剤DL](#) 3 A 【3~4kg/10a 7日/3回】

スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

留意事項

- 1 田植直後（約20日間まで）の小さな苗のみを食害する。
- 2 スクミノンはたん水状態（3~5cm）で均一に散布。散布後7日間はたん水状態にし、落水やかけ流しをしない。また、水田以外に使用しない。
- 3 冬期に水田や水路に水をためない。
- 4 石灰窒素は高濃度のチッソ肥料でもあるので、代かき前に施用する場合は元肥量の加減をする。

防除方法

- 1 水田や水路の貝を拾い取るとともに、卵塊を水中に落とす。卵は水中ではふ化できないため、卵塊を水中に払い落とすことで駆除が可能。ただし、ふ化直前の黒~白っぽい卵は水中でふ化可能であるため、除去又は押しつぶすことが必要。また、用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網（網目9mm以下）を設置する。
- 2 行動を抑制するため水深4cm以下の浅水管理を行う。
- 3 植代前耕起後に湛水して3~4日後に石灰窒素を散布、3~4日放置後代かきを行う。（漏水を防止すること。）
 - ・ [粒状石灰窒素40](#) — 【20~30kg/10a 植代前/1回】
- 4 食害防止を目的として、下記薬剤をは種前に育苗箱床土に均一に混和するか、又は移植当日に育苗箱中の苗の上から均一に散粒する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) 1 4 【育苗箱1箱当り60~100g は種前又は移植当日/1回】
- 5 田植直後に殺貝のため下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スクミノン](#) — 【1~4kg/10a 60日/2回】
 - ・ [スクミンペイト3](#) — 【2~4kg/10a 発生時/—】
 - ・ [ジャンボたにしくん](#) — 【1~2kg/10a 60日/2回】
- 6 食害防止を目的として水稲移植直後に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [パダン粒剤4 劇](#) 1 4 【4kg/10a 30日/6回】
- 7 刈取後3~4cmに湛水し、1~4日後に石灰窒素を散布、3~4日放置する。（漏水を防止すること。）
 - ・ [粒状石灰窒素40](#) — 【20~30kg/10a 刈取後（水温15℃以上の時期）/1回】
- 8 越冬個体は約8割が地表から深さ6cm以内に分布。稲刈りにロータリーによる水田耕起（耕うんを浅く、ロータリー回転を速くする）を行い、土中に潜った貝を粉砕

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

し貝の密度を下げる。

イネシンガレセンチュウ

留意事項

- 1 0.5～0.7mmほどの線虫がイネに寄生して発症する。葉の先端部の3～5cmがこより状に白く枯れる。ほ場全面に発生すると「ホタルイモチ」とも呼ばれる。
- 2 被害籾は登熟不良となり、しいなが多くなる。多発ほ場では10～30%減収することもある。
- 3 特徴的な症状として、玄米の一部がくさび状に黒変する黒点米を生じ、検査等級格下げの原因になる。
- 4 被害もみ・もみがらが翌年の伝染源となる。
- 5 イネのほか、あわ、エノコログサなどにも発生する。
- 6 薬液法による種子消毒の際にスミチオン乳剤やパダンSG水溶剤を混用する場合、高濃度短時間処理には対応していないので殺菌剤も低濃度長時間浸漬とする。
ベンレートT水和剤20は高濃度短時間処理に対応している。

防除方法

- 1 種子消毒を下記のいずれかの方法で行う。
 - (1) 温湯浸漬法
乾燥もみを60℃の温湯に10分間浸した後、直ちに冷水で冷やす。
 - (2) 薬液法
種子を薬液に浸漬する。種子消毒のページ5-2を参照。
- 2 出穂期から開花期に下記の薬剤を散布する。
 - ・ [スミチオン乳剤](#) 1 B 【1,000倍 21日／2回】

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

主な登録農薬一覧表（本田施用剤）

1 殺菌剤

農薬名	適用病害								使用基準
	いもち病	紋枯病	白葉枯病	もみ枯細菌病	ごま葉枯病	内えい褐変病	稲こうじ病	小粒菌核病	
オリゼメート粒剤 P 2	○		○ ※	○ ※	穂				葉いもち：初発10日前～初発時 他：出穂3～4週間前（収穫14日前）／2回
オリブライト250G 1 1	○	○			穂				出穂10日前（収穫45日前）／1回
コラトップ粒剤5 1 6. 1	○			○					葉いもち：初発10日前～初発時 他：出穂30～5日前／2回
ゴウケツ粒剤、 サンプラス粒剤、 1 6. 3	○		○	○		○			出穂5日前（収穫30日前）／1回
ゴウケツパック、 サンプラスパック 1 6. 3	○			○		○			出穂5日前（収穫30日前）／1回
バリダシン液剤5 U 1 8		○		○					14日／5回
フジワン粒剤 6	○						○	○	葉いもち：初発7～10日前 他：出穂10～30日前（収穫30日前）／2回
ブラシフロアブル U 1 4 1 6. 1	○			○	○ 穂	○	○		7日／2回
モンカット粒剤 7		○							出穂30～10日前（収穫14日前）／3回
モンガリット粒剤 3		○			穂		○		45日／2回
リンバー粒剤 7		○							30日／2回
ルーチン粒剤 P 3	○		○		穂				30日／2回

(1) 適用病害について

○：登録あり 穂：穂枯れ（ごま葉枯病菌）に登録あり ※：移植活着後も使用可

(2) 使用基準の使用回数は、本田にて使用できる回数

2 殺虫剤

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

農薬名	RACコード	適用害虫											使用基準					
		ウンカ類	ツマグロヨコバイ	(ニカメイチュウ)	コブノメイガ	イチモンジセリ	(イネツトムシ)	フタオビコヤガ	(イネアオムシ)	カメムシ類	イナゴ類	イネミズゾウムシ		イネドロオウムシ	イネゾウムシ	イネセンチュウ	スクミリンゴガイ	(ジャンボタニシ)
アプロード水和剤	16	幼	幼															7日/4回
エクシード粉剤DL	4C	○	○					○										7日/3回
エクシードフロアブル	4C	○	○					○	○									7日/3回
エミリアフロアブル	4F	○	○					○			○							7日/2回
オーケストラ粉剤DL	—	幼	幼															7日/3回
オーケストラフロアブル	—	幼	幼															7日/3回
キラップ粒剤	2B	○						○										14日/2回
ジャンボたにくん	—															○		60日/2回
スタークル粉剤DL	4A	○	○	○				○	○	○		○						7日/3回
アルバリン粉剤DL		○	○	○				○	○	○		○						7日/3回
スタークル粒剤		○	○	○				○			○	○						7日/3回
アルバリン粒剤		○	○	○				○										7日/3回
スタークル顆粒水溶剤		○	○					○										7日/3回
アルバリン顆粒水溶剤	○	○					○										7日/3回	
スタークル豆つぶ	—	○	○					○										7日/3回
スクミノン	—															○		60日/2回
スクミンベイト3	—															○		発生時/—
スミチオン乳剤	1B	ヒ		1,2		○	○	○				○			○			21日/2回
ダントツ粒剤	4A	○	○	○				○										7日/3回
トレボン粉剤DL	3A	○	○	○	○	○	○	○	○	成	○							7日/3回
トレボン乳剤		○	○		○			○	○	○	○							14日/3回
トレボン粒剤		○	○	1					○	○	○	○						21日/3回
なげこみトレボン		○	○	1					○	○	○							5葉期以降(21日)/3回
パダン粒剤4 劇	14			○	○	○	○									食		30日/6回
パダンSG水溶剤 劇				○	○	○												21日/6回
粒状石灰窒素40	—															○		刈取後(水温15℃以上の時期)/1回

- (1)適用について：○…成・幼虫ともに登録あり 幼…幼虫に登録あり 成…成虫に登録あり 食…食害防止
 ヒ…ヒメトビウンカに登録あり 1…ニカメイチュウ第1世代に登録あり 2…ニカメイチュウ第2世代に登録あり
- (2)使用基準の使用回数は、本田にて使用できる回数
- (3)オーケストラ（ベンズピリモキサン）のIRACコードは申請中で未定のため □ としている

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

殺虫剤(続き)

農薬名	RACコード	適用害虫											使用基準			
		ウンカ類	ツマグロヨコバイ (ニカメイチュウ)	ニカメイガイ	コブノメイガ	イチモンジセリ (イネツトムシ)	フタオビコヤガ (イネアオムシ)	カメムシ類	イナゴ類	イネミズゾウムシ	イネドロオウムシ	イネゾウムシ		イネセンチュウ (ジャーンボタニシ)	スクミリンゴガイ	
アブロードパダン粒剤 劇	I: 14 F: 16	幼		○	○	○										30日/4回
パダントレボン粒剤 劇	I: 3A F: 14	○	○	○	○							○	○			30日/3回

(1)適用について：○…成・幼虫ともに登録あり 幼…幼虫に登録あり 食…食害防止

(2)使用基準の使用回数は、本田にて使用できる回数

3 混合剤(殺菌・殺虫剤)

農薬名	RACコード	適用病害虫											使用基準				
		いもち病	紋枯病	もみ枯細菌病	内えい褐変病	ごま葉枯病	稲こうじ病	ウンカ類	ツマグロヨコバイ (ニカメイチュウ)	ニカメイガイ	コブノメイガ	イチモンジセリ (イネツトムシ)		フタオビコヤガ (イネアオムシ)	カメムシ類	イナゴ類	イネミズゾウムシ
ワイドパンチ豆つぶ	I: 2B F: 11	○	○			穂	○	○							○		35日/1回
ダブルカットバリダトレボン粉剤3DL	I: 3A F: 24 16.1 U18	○	○	○	○			○	○						○		穂揃期/2回
ゴウケツモンスター粒剤	I: 4A F: 3 16.3	○	○	○		穂	○	○	○						○	○	出穂5日(収穫45日)/1回

(1)適用病害について：○…登録あり 穂…ごま葉枯病菌による穂枯れに登録あり

注1:同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2:粒剤施用後は7日間、落水やかけ流しを行わないこと。

注3:異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。